

肉用繁殖雌牛の集約的飼養法に関する実証試験（第2報）

黒木 寛・横山文泰・図師隆一・岩下 忠・長友邦男・井好利郎
(宮崎総合農業試験場)KUROKI, H., YOKOYAMA, H., ZUSHI, R., IWASHITA, T.,
NAGATOMO, K. and IYOSHI, T.

Studies on the Intensive Feeding of Breeding Beef Cows.

複合経営を想定して、飼料専用ほ50aでの繁殖牛10頭飼養における技術上の可能性については本誌第37号で報告したが、今回は引続き49年度の成績をとりまとめたのでその概要を報告する。なお、試験の趣旨、方法については、第37号のとおりである。

結果および考察

1. 繁殖牛の飼料給与実績と体重

年間に要した飼料の給与量は表1のとおりである濃厚飼料は必要な牛のみ分娩前後2～3ヵ月に1日1～2kg与えたが、年間1頭当りに換算すると約220kgであった。粗飼料は生草、野乾草、稲藁を利用し、その給与量は1日/1頭当り生草換算で約41kgであった。この給与量はほぼ体重450kgの維持量で、この点当該試験牛の平均体重も約450kgであり標準的な給与量であったといえよう。しかし、群中における体重のバラツキはかなりあり、個体毎の飼料の過不足は避け得なかった。このことから群管理方式をより経済的、合理的な飼養体系にもっていくには除角とともに発育の斉一性を十分考慮する必要がある。

2. 繁殖成績

今回の繁殖成績は受胎率100%、分娩後受胎までの日数約90日、子牛生産率97%であり、また、10頭中1頭の特例（胚の早期死滅による受胎遅延）を除外すれば分娩後受胎までの日数が76日、子牛生産率が101%となり非常に良好な成績であった。

3. 子牛の飼養管理と発育

子牛の飼養管理および飼料給与基準は本誌第37号のとおりである。その結果、子牛約9.7頭の年間における飼

料給与量は濃厚飼料3.4t、乾草3.2t、生草14.7tであった（但し、セリ市出荷平均月令9.8ヵ月令）また、生後8ヵ月令までの発育成績は、♀においては黒毛和種発育範囲の平均値で推移し、♂においてやや平均値を下廻る増体でいずれも正常発育であった。

4. 労働利用

年間に要した労働時間は約1,287時間であり、粗飼料生産労働に要した時間が約601時間で飼養管理が約686時間であった。また、飼養管理の686時間を1日1頭当りに換算すると約11分で、単房飼いに比べかなりの省力化であった。

5. 飼料生産

50aの飼料専用ほ場における飼料作物の高位生産を狙いとして、堆肥を中心とする多肥栽培、高収量の作物および50aの面積を2分しての輪作体系を図った。その結果、年間の総収量はイタリアン48t、トウモロコシ25t、ソルダン37tの計110tで10a当り22tの生産量であった。以上のことから堆肥を中心とした多肥栽培と合理的な土地利用、作付体系および生産物の利用を図るならば10a当り年間20tの生産は経営的にも技術的にも可能と思われる。

6. まとめ

以上の結果から飼料専用ほ50aを用い繁殖牛10頭を群飼いする飼養方式の可能性については、労力的には十分複合経営として飼養が可能であり、また、粗飼料の自給面においても年間必要量の60%程度は50aの栽培飼料から自給できるので、残りを複合作物の副産物および野草利用によつての自給体制もけつして不可能ではない。

表1 繁殖牛の飼料給与量(kg)

年間延頭数	濃 厚 飼 料			粗 飼 料			備 考
	総給与量	年間1頭当り給与量	1日1頭当り給与量	総給与量	年間1頭当り給与量	1日1頭当り給与量	
3,650頭	2,226	222.6	0.61	149,120	14,912	40.9	生草換算率は第37号参照